

編 集 後 記

アーサー・クラインマンは、“病い”について「症状自体の表面的な意味」「文化的に際だった特徴をもつ意味」「個人的経験に基づく意味」「病いを説明しようとして生ずる意味」という4つの意味があるとしました。第一と第二の意味は社会・文化のなかに埋め込まれており、第三の意味は個人のなかで、そして第四の意味は、個人と社会との関係のなかで構成される意味です。患者さんには、病気の他に、この、文化、個人、社会関係により与えられ、創り出される病いの側面があります。この背景に、言語は大きな意味を持ちます。

コロナ禍も3年目となりますが、本紙への投稿数は、本年度51編で、前年度比53編減と、大幅に減っています。その原因として、日本語での論文化に、若い人が意味を失いつつあるのではないかと危惧します。新しい内科専門医制度が始まり、その修了生を輩出して、今年度で2年目です。膨大な時間を、ネットの前で過ごす姿に、疑念が無いわけではありません。しかし、その背景に、内科全般を見られる医師を育てたいという、崇高な理念もあります。その理念は解りやすく、共感する若い医師も多いと思います。J-OSLERでは各症例の振り返りの言語化を求められています。それに比して、“論文は実際の患者さんに役立つ

い”，という風潮を危惧します。しかし、医学の発展は、手続き記憶ではなく、言語化による意味化によりもたらされた物です。人の記憶は曖昧で、言語の反芻で作られます。それだからこそ、症例を論文として言語化することには大きな意味があります。自分の行為、思考の言語化による論理的な振り返りは、人と社会を大きく成長させます。そして“病い”に対峙するとき、それは母国語と深く結びつきます。

我々は母国語で、“神経”という言葉を持つ国民です。杉田玄白が“世奴(zenuw)、此に神経と翻す。その色白くして強く、その原脳と脊とより出づ。蓋し視聴言動を主どり、且つ寒熱を知る。諸々動く能わざる者をして能く自在ならしむる者は此の経あるを以ての故なり。”と言語化したからです。人は言語化により、初めて、概念化できます。論文化すると言うことは、体験を、概念化し、伝えられるようにすると言うことです。その経験は、医師の力となります。今月号では、神田 隆先生も、この論文化の重要性を説かれています。神経という言葉をもつ国の脳神経内科医として、是非、この国の“病い”を、母国語で記録して下さい。

(小野寺理)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第63巻 第1号	2023年1月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		西 山 和 利
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>